ルーブルで活躍女性修復家

ドラクロワの大天井画も手がける

ルーブル美術館でブロンデルの作品を修復する加賀優記子（1986年）

加賀優記子

昨年出版された藤田宜永の小説「壁画修復師」（新潮社）には、フランスの田舎町で中世フレスコ画の修復に没頭する日本人修復家と彼をめぐる人間模様が描かれている。モデルは男性だ。それもそのはず、高い足場にのぼったりするため危険が伴うことや、天井画など不自由な姿勢での作業が長時間続くことで体力を要したり、薬品を使うことで体を壊したりする。

そんな理由で女性には不向きなようだが、日本だけでなく海外でも活躍する加賀は珍しい存在だ。しかし、加賀は「確かに日本人で活躍している人は四人ぐらいしかいませんが、ヨーロッパでは多いですよ。コツコツとやる仕事ですし、むしろ女性に向いているのではないでしょうか」

加賀は武蔵野美術短期大学で油絵を学んだ後、一九八六年に渡仏し、ルネサンス時代の古典技法を勉強しながら修復技術を学ぶ。「修復を学ぶようになったのも、初めは絵画の技法を知りたい一心からで、修復を勉強することで技法を学ぶことができると思ったからなんです」

しかし、徐々に修復の面白さにはまり込み、八六年から九二年までルーブル美術館絵画修復員として、同美術館専任修復家のクリストフ・クシェジェンスキーの元で働いた。ニスの研究家として知られる彼に従い、ルーブル美術館で一緒にニスを引き直す作業を行っていたという。

「アングル、ジェリコーなどの作品にニスを引き直すうちに、それまで黒い背景の中にあってはっきり見ることのなかった人物像が驚くほど鮮明に浮かび上がってきて絵画作品の見え方が一変。改めて修復におけるニスの重要性を再認識しました」。そしてニスの研究をライフワークとして研究を続けていくことに―。

滞在中にルーブル美術館天井画、ノートルダム・ド・クリュニャンクール寺院壁画、フランス国会議事堂（ブルボン宮殿）ドラクロワの壁画、ベルサイユ宮殿アフリカの間の壁画修復など手がけてきた。

一番の思い出は、スタッフの一員としてルーブル美術館にあるフランス・ロマン派の巨匠、ドラクロワの「サルダナパールの死」を修復したこと。絵の具がはげ落ち始めたこの絵は、国家的な美術品であると同時に巨大で移送が不可能だったため、美術館に展示したまま修復された。揺れる足場にのぼり、観光客の視線を感じながら絵の具をコテで定着するのに悪戦苦闘。「でも絵の具のにおいや目の前に広がる華やかな色彩は忘れられません」

次に手がけたのはコンコルド広場に面して建つブルボン宮殿の「王の間」。現在、この宮殿はフランス国会議事堂として使用されているが、「王の間」と呼ばれるサロンにはドラクロワの大天井画と壁画がある。暖炉の煤で黒く汚れた天井画の画面の洗浄や黄色く変色したニスを取り除く作業を行ったことでドラクロワに強く引き付けられたという。これには二年間にわたり修復に携わった。

ルーブル美術館専属の絵画修復員であるため、今でも同美術館の管轄で地方の美術館の修復をやるために呼び出される。

九八年に小山敬三美術振興財団から助成金を受け、アメリカからヨーロッパの主要な修復研究所をまわりニスの情報を集めた。五〇年代から欧米で使用され始めた合成樹脂系ニスと、ヨーロッパで古くから使われている天然樹脂との比較研究のためだ。

そして、現在ベルリン国立博物館ラトゲン研究所でニスを研究中で八月に帰国する。「試験管と分析機器が並んだ化学ラボトリーの雰囲気。良い修復家になるためには美術史の知識、語学力、化学の知識も必要です。一生学んでいなければなりません」

現在、NHK出版から出す予定の「絵画修復～ルーブルの舞台裏から」（仮題）を執筆中。「修復の面白さはドラクロワなど有名な絵に手で触ることができるということです」。地味なようだが一番ぜいたくな仕事かもしれない。

「知識・語学・化学……一生が勉強」